

# 赤川遺跡

～道道奥尻島線改修工事にともなう試掘調査(B調査)報告書～

2002年

奥尻町教育委員会

# 赤川遺跡

～道道奥尻島線改修工事にともなう試掘調査(B調査)報告書～

2002年

奥尻町教育委員会

## 例 言

1. 本書は道道奥尻島線道路改修工事にもなう赤川遺跡試掘調査(B調査)報告書である。
2. 本書の編集・執筆は木村哲朗が担当した。
3. 整理作業は以下のものが携わった。  
土器復元・接合：天内千秋・大崎恵美子・工藤竹美・近藤美佐子  
土器実測：木村哲朗、トレース：近藤美佐子、土器拓本：天内千秋・工藤竹美  
写真現像：中澤一夫
4. 写真撮影は木村哲朗が行った。

## 凡 例

1. 本書の挿図の縮尺は以下の通りである。  
図 I - 1 : 1/500,000 図 I - 2 : 1/2,000 土器拓本 : 1/3 復元土器 : 1/2
2. 遺物の写真図版は実測図、拓本図の縮尺に合わせた。

## 目 次

例言	i
凡例	i
目次	i
挿図目次	i
写真図版目次	i
第 I 章 遺跡の概要	1
1 節 調査要項	1
2 節 調査の経緯	1
3 節 赤川遺跡の概要	1
第 II 章 遺 物	3
第 III 章 まとめ	4
・挿図目次	
図 I - 1 奥尻島南部の縄文時代の遺跡と赤川遺跡	2
図 I - 2 赤川遺跡調査地点図(部分)	2
図 II - 1 出土土器図	3
・写真図版目次	
図版 1 出土遺物	5

# 第 I 章 遺跡の概要

## 1 節 調査要項

事業名：道道奥尻島線改修工事にともなう試掘調査（B調査）

原因者：北海道

遺跡名：赤川遺跡（C-07-12）

遺跡所在地：奥尻郡奥尻町字富甲277ほか

調査期間：平成9年8月24・25日

調査体制：調査担当者 北海道教育庁文化課調査班 田才 雅彦

調査事務局 奥尻町教育委員会課長 高山 延三

係長 泉沢 克尚

学芸員 木村 哲朗

## 2 節 調査の経緯と調査方法

奥尻町の幹線である道道奥尻島線は道幅の狭い場所が多く、各地点に於いて改修計画が立案されていた。その中で当地点は周知の遺跡である赤川遺跡を南北に分断する形で道道が通っているため、両側の改修部分における包含層の範囲確認の必要性が生じた。そこで、平成9年8月24・25日に北海道教育庁文化課調査班の田才氏が来局し、試掘調査（B調査）を行った。

調査の方法は約50m毎に長径3m、短径2mの範囲の包含層を層ごとに重機で掘り上げ、層ごとに遺構の有無を確認しながら、掘り上げた土の中より遺物の採集をした。調査地点は全部で19箇所であり、遺物が出土したのは2箇所（内訳は調査地点No.1が89点、No.2が1点）であった。なお、改修工事は、多数の遺物を検出した調査地点No.1とその周辺のみ見送られることになった。

## 3 節 赤川遺跡の概要

本遺跡は、奥尻島の南部、富甲地区の南端、海岸線に面した丘陵上及び海側に北東—南西に伸びる砂丘上に位置する。昭和31年1月に“北海道奥尻島遺跡調査概報 考古学雑誌第41巻 2号”で報告された。当時は砂丘の部分は発見されておらず、段丘上で縄文時代中期・晩期の土器、石鏃、石槍などが表採されていた。その後建設されたコンクリート工場付近の切り通しで、擦文土器の破片が発見され、砂丘上も遺物包含層であることが分かった。遺物を検出した2箇所の調査地点は図I-2に示す。

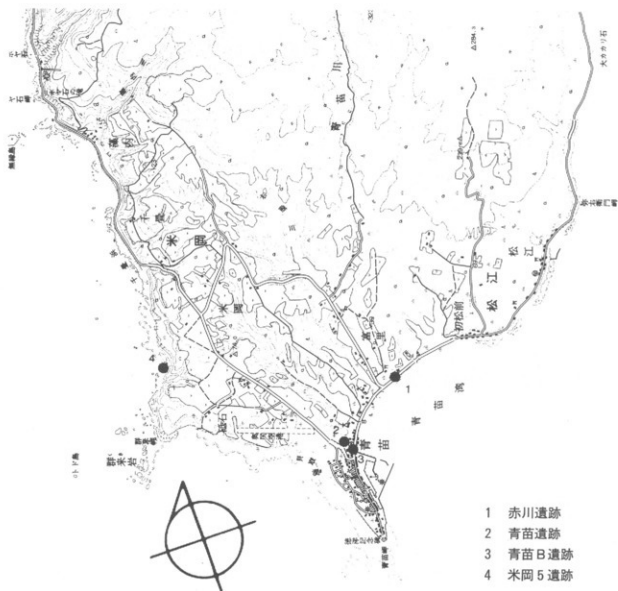


図 I - 1 奥尻島南部の擦文時代の遺跡と赤川遺跡

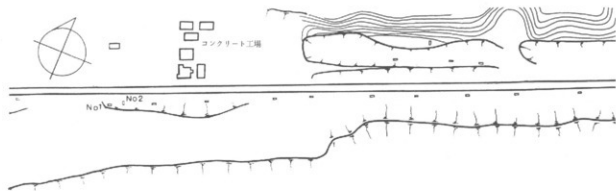
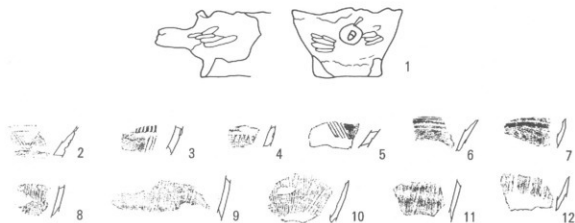


図 I - 2 赤川遺跡調査地点図 (部分)

## 第Ⅱ章 遺 物

当遺跡からは擦文時代の土器が90点出土した。以下出土土器のうち特徴的なものを挙げて説明する。

1は当試掘調査唯一の復元個体である。注口土器は擦文時代の遺物としては管見の限りではほかに例を見ない。器形は浅鉢形を呈するミニチュア土器である。口唇の段面形状も場所により丸みを持つところや角形のところがあり、口縁も凹凸があり、極めて雑な作りである。器面には横方向のミガキが認められる。注口部は棒状の粘土を器面に垂直につけ、外面から棒状工具で穿孔したものである。内面には横方向のハケ目状擦痕がみとめられる(写真図版2段目)。色調は外面が黄褐色、内面は薄い赤褐色である。



図Ⅱ-1 出土土器図

2～5は刻線文の描かれたものである。2は2本の横走沈線を施した後に2本1組の並行する沈線が鋸歯文を描く。3は上位に刻みの施された横走する貼付帯がめぐり、その下位には並行する2本の沈線が1と同様の文様を展開しているものと考えられる。4は2本の横走沈線に挟まれたキザミが2段めぐるものである。5は3本1組の並行する沈線が描かれたもの。6は無文のもので口縁の破片である。口唇直下に横方向のナデ整形が認められる。7は杯の胴部と考えられるもので、胴部にめぐる段が認められる。8～12は深鉢形土器の胴部破片で、8～11は縦方向のハケ目状擦痕が認められるもの。12は目の粗い木筥状工具による縦方向の擦痕が認められるものである。

2・3・4の特徴は明らかに青苗遺跡のものと同じ文様展開であり、ほかの破片についても胎土や焼成、ハケ目状擦痕などの調整のあり方などは青苗遺跡の例と酷似する。また1についても、ミガキやハケ目状擦痕が認められるところや、焼成が青苗例と共通するほか、注口こそないが同じ器形のものが青苗遺跡から出土しており、このことから当地点よ

り出土した土器はすべて擦文時代後期のものと位置づけられる。

### 第三章 まとめ

奥尻島南部における擦文時代の遺跡は、当遺跡のほかは、出土遺物が重要文化財指定に向かっている青苗遺跡、西海岸にある米岡5遺跡、出土場所などから青苗遺跡との密接な関係が想定される青苗B遺跡が挙げられる。出土土器から、米岡5遺跡以外は、擦文時代後期に属するものと考えられ、本遺跡は青苗湾側に分布する擦文時代後期の遺跡群の一つと位置づけられよう。

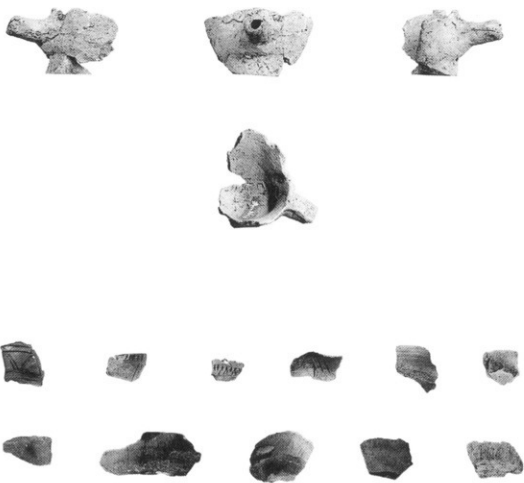
当遺跡の調査地点のうち遺物が多量に出土したNo.1は、ほかの調査地点に比べ深く、堅穴住居跡であった可能性も考えられる。また、出土土器類は青苗例に比べてどの破片も小型のようである。このことが住居跡の可能性のある当地点のみの特徴であるのか、赤川遺跡全体の特徴であるのかは今後の課題となろう。

なお、注口土器は、器形等が浅鉢形であるなど統縄文時代の例と似ている面もあり、時期を擦文時代後期とすることには異論があるかもしれない。しかし、サケ・マス漁や原始的な畑作の存在などが擦文時代の生業の中心と位置づけられる中、奥尻島では擦文時代後期以降においても貝類等の採集や海獣類の狩猟を大々的に行った痕跡があり、数多くの骨角器を制作・利用するなど、独自の“ライフスタイル”が営まれていたと考えられる。注口土器は統縄文時代を特徴づける遺物であるが、奥尻島という特殊な環境の中で、統縄文時代にそれが必要とされてきた価値ないし信仰の“残り香”が、退行しながらも、僅かに遺存していたと考えることはできないであろうか。

#### 参考文献

- 石橋孝夫 1977 石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点 D地区発掘調査報告書  
木村哲朗 1998 青苗B遺跡  
佐藤忠雄 1981 奥尻島青苗遺跡

图版 1



出土土器



---

## 赤川遺跡

～道道奥尻島線改修工事にともなう試掘調査(日別表)報告書～

2002年5月発行

発行 奥尻町教育委員会  
奥尻郡奥尻町字奥尻317番地地先  
奥尻町海洋研修センター内  
TEL 01397(2)3890

印刷 ㈱長門出版社 印刷部  
北海道函館市日乃出町11番13号  
TEL 0138(52)2461

---